

作品であるが、前者二編にはフリーエの結婚観（「寝取られ夫」論）の影響を読み取ることも可能である。

ドストエフスキーは、『ペテルブルグ年代記』において、フランスの小説家、ウージェーヌ・シュエーバルザックに学んだフェリエトン作家として、ペテルブルグの街、自然、住人たち、出来事、事件などを描き、評論家としても語る。フェリエトン作家としての技法は、『プロハルチン氏』、『家主の妻』、『ボルズコフ』、『クリスマス・ツリーと結婚式』、『白夜』などでも活用されている。そこには、フェリエトン作家としての、人間に対する目が、ユートピア社会主義への傾倒を培っているという側面が存在する。

検閲を考慮しても、これらの作品は、社会主義社会実現を目指して書かれてはいないように思える。ドストエフスキーは、ベリンズキーと異

なつて、社会主義リアリズムを実現させようという意思はなく、あくまでも芸術の「自律性」を体现させようとしている。ユートピア思想を信じて活動したことが作中に投影されているとしても、それは作品を構成する一要素に過ぎない。

周知のように、ドストエフスキーは、一八四九年四月二十三日の早朝に、ペトラシエフスキーの会の活動に参加したという理由で逮捕される。『裁判記録』を読むと、ドストエフスキーの供述は適切で賢明なものであるという印象を受ける。だが、彼は、ゴーゴリへのベリンズキーの書簡を集会で朗読し、印刷機を使って反政府的文書を流布することを計画したかどで、セミヨノフスキー練兵場にて、銃殺刑の宣告を受け、執行の直前に、皇帝の特赦という形で、本当の刑罰、四年の徒刑と四年の兵役を言い渡される。

原発とドストエフスキー（提言）

長瀬 隆

核分裂を起こす物質はウラン以外にも存在してその代表はトリウムである。

米国での原発製造の初期段階でウランと競合していたが、燃料として使用するさいに、これとは異なつて副産物としてブルトニウムを出さないことを特徴とする。それは原発の安全操業にとつては願つてもない長所であり、ウランとは異なつて偏在せず、地上に広く豊富に分布していて経済的にもはるかに有利であった。しかし核弾頭にブルトニウムを期待していた政産軍複合体に忌避され、陰謀的に葬られた。こうして原発はすべてウランが排他的に独占することとなり、トリウムはその名称さえ知る人が稀になつた。

米国内のこの経緯を知りつつ、挫折せしめられたその研究を日本で継続

ドストエフスキーにおける、ユートピア社会主義への共感とは、彼が、少年時代から、家庭で宗教教育を受け、『旧約・新約聖書から取った百四つの物語』、聖書に親しみ、聖書の言葉を魂の糧とし、キリストへの敬愛の念を培つて来たことに起因していたと思われる。

ドストエフスキーは、ユートピア社会主義のための活動のせいで、シベリア流刑となり、そこで民衆と出会い未知の人間も発見し五大長編の素材にしているし、その活動があったればこそ、一八六二年のヨーロッパ旅行の成果である『冬に記す夏の印象』でパリのブルジョア・金銭への執着、ロンドンの科学技術・「水晶宮」を批判した後、『地下室の手記』での、彼が若年期に抱いたユートピア思想を起源に持つ、チエルヌイシエフスキーの『何をなすべきか』の功利主義、「水晶宮」への批

発展させ、トリウム熔融炉FUIIとして完成させた人に古川和男理博（一九二七～二〇〇一）がいる。私の妻とは大分市中島での幼なじみであつて、一九九九年にはご兄弟で拙宅に遊びにみえており、その一般向けの啓蒙書『「原発」革命』（文春新書、二〇〇一）は贈呈されていた。つまり私はフクシマ以前に、安全、経済的、民主主義的、核拡散と無縁な原発の存在を知っていた。しかしこれに一著を企図することになったのは、一一・三・一一フクシマの衝撃のためだった。以来この人の業績の紹介研究に没頭することになり、三年を要して本年八月『トリウム原子炉革命 古川和男・ヒロシマからの出発』（展望社）を上梓した。（朝日一面の広告は八月九日）。私としては一冊の訳書を含めると七冊目の、それも初めての理系の著書である。こうしてこの重労働から解放され、今年になつて贈呈されていたながら読めずに来た高橋誠一郎『黒澤明と小林秀雄

「罪と罰」をめぐる静かなる決闘』（成文社）を開くことになった。ずばりこれとが序文に縷々述べられている。それが黒澤のオムニバス形式の映画『夢』の一つ、富士山麓の（架空の）原発事故の挿話を思い起こさせたのであり、また湯川秀樹との対談で「原子力の平和利用」に激しく疑義を呈していながら、ウラン原発が国策として採用されると黙認した小林秀雄に対する批判となり、黒澤の先駆的かつ人間的な生き方の賞讃となった。

プロレタリア文化・文学運動に対する斜に構えた「批判者」として登場しながら、小林はもつともらしい理屈をつけながら、結局は時流に媚び迎合する文章を発表しつづけたのであり、戦後は数年間ものが書けなくなったのである。「Xへの手紙」や戦中の座談会の発言まで引用しながらなされる高橋のこのあたりの分析はみごとである。問題の文章と発言

はすべて全集から削除されている、との指摘も鋭い。

対するに戦前のプロ文化に出發しつつ、戦中迎合を余儀なくされた体験から戦後、自省をもつて生きることになった黒澤には、映画というジャンルの重視せざるをえない大衆性の要求ということもあって、ドストエフスキーの読み方は素直である。映画「白痴」は南方の戦場で死線を越えて来た兵士をムイシキンと把握して描いた作品といえよう。映画を蔑視しつつ、「ムイシキンは（スイスからではなく）シベリアから来たんだよ」と繰り返す小林は黒澤にとって（同じく高橋にとって）は嫌らしい存在だった。高橋書は両人の長期にわたって続いた対立を「静かな決闘」として捉え、とことん追求している。

小林の時流への迎合が今日改めて批判されねばならないのは、ウラン原発が五十四基も設置されたのが、その体制のなかに大小無数の小林が居たためだからである。満州事変から広島・長崎への原爆受難に至った流れのなかには、これへの迎合者たちがいた。この間に執筆された小林のドストエフスキー論は、これと闘うためのものではなく、宿命と諦めるためのものだった。黒澤と高橋の立場はこれとは異なり、対立する。

私は前掲書を書く過程で、古川和男の「原理的に正しい技術も、人間社会の様々な動きのなかで、ときには不当な扱いをうけることがある」という嘆きの言葉に触発された。それが『カラマゾフの兄弟』の序文の「奇人」についての言葉を想起させるものだった。イエスを念頭におきながら作者は「奇人」というものは特殊で孤立的だ」と記している。フクシマの年の一二月に古川は逝ったが、死を間近に控えた講演では、自らの発明であるトリウム熔融塩炉による「人類、地球の救済」を熱く訴えていた。そ

の姿はさながら預言者・救済者のそれであって、私は心うたれたのである。絶えて久しくこういう言葉に出会うことがなかったのである。これは原発問題がドストエフスキー問題でもあることを知った瞬間だった。

高橋書で注目されたいま一つは、「ドストエフスキーは私にとってガウス以上であった」というアインシュタインの言葉が紹介されていることである。拙著『ドストエフスキーとは何か』（二〇〇八、成文社）でレオーノフの指摘として私は言及しているのであるが、このテーマを取り上げた著書にソ連のクズネツォフの『アインシュタインとドストエフスキー』（一九七二）がある。一九八五年に邦訳されているのであるが、実は読んではいなかったものであって、今回初めて通読した。前掲拙著の関連でこのところ原爆・原発の歴史問題に取り組んできていたので、相当地に理解しやすかった。（アインシュタインはモーツァルト

をも愛好していて、この面から小林秀雄を見ることがまた可能となった）。

この数年ドストの会の報告は、重箱の隅をほじくるような些末なテーマの報告が続いている。会は停滞している。高橋と私の書の刊行を機に、全員参加の「原爆・原発とドストエフスキー」といった大きなテーマでのシンポジウムを企画してはどうだろう。木下代表は長崎市の出身であるが、このテーマで書いたり話したことは無かったと思われ、この機会にそれが聞ければ幸いだ。

手始めに第一回として高橋書を取り上げてはどうだろう。報告者を私が買って出てもよい。この書は或る意味でフクシマに触発された小林秀雄批判の書としても読めるのであって、会には小林の頑固な擁護者もまたいるのだから、賑やかな論争が期待できよう。これはみんなに有益だろう。大きなテーマに取り組もうではないか。

（二〇一四年一〇月一〇日）